

七 誘惑いう わく

恐ろしい叫喚けうくわんの巷ちまたは、勝敗の定まると共に、自づともとの静かさにかへらうとしつゝありました。踏み荒された畑うねの畝うねに、青いものが蹂躪にじられたまゝに見えてゐるのも侘わびしく、野の中に窺やつれて見える立木たちぎの下などに、折れたり毀れたりした武器が散らばつてゐました。森ちんもくの沈黙イギリスは英吉利の勇將ゆうしやうが最後を語り、そこから飛びたつて空を行ゆく。

く鳥の姿もなく、より以上の寂しさが戦場を支配しようとして居りました。

遙かに退いて行つた英軍を、退くまゝに委せて、とある樹陰に息をやすめてゐたシャルルの一行は、今、デュノアがこゝを目ざして馬を駆けさして来るのをみました。

『やあ、デュノアどの、卿はどこでか少女子を見られませなんだか?』とラ・ヒールはもどかしさに聲をかけました。

『わしはまた、此方に居られるものとばかり思ひましたので。』

『はて、先程は卿があたりに戦はれてのやうにみうけられましたが

——?』

シャルルを初め^{はじ}皆々顔を見合せました。

『陛下^{おんあ}の御邊りが危険とみました時、わしはジャンヌと別れましてござりまするが。』

不安は人々の胸を襲ひました。

『もしや雄々しい心に深入りして、敵^{かこ}の圍みに落ちたかも知れぬ。皆々^{ついで}續け、少女を救はねばならぬぞ！』

シャルルは眞^まつ先にひらりと馬に飛び乗られました。

丁度その時分でございました。續く者もなくたゞ一人、馬をどこかに乗り捨てたジャンヌは、一人の騎士の後を追うて、ひた走りに野を走つてゐました。その時ジャンヌは、たゞ追ふといふ念^{ねん}より外

の働きはないやうにみえました。惨憺さんたんとした廣場ひろばの遙はるかな森のかげに、高く聳そびえて見えるライムの尖塔せんたふは、日の光りをうけてきら／＼と輝き、大空は瑠璃色るりいろに限りもなく展ひらけてゐました。

鎧も兜も、すべて全身を黒く装ひ、顔には猶頬當ほゝあてをしつかとあてた騎士を、やう／＼追ひつめたジャンヌは、『やい、鳥のやうな速さで、少女をおびき出した誘惑者かどわかし！ 英吉利人の頭から、死と運命とを除かうといふ計略けいりやくは見破つたぞ！』

『えゝつ、うるさく後をつけ居るわい！ わしはお前が手に落すやうな命は持たぬ。』

『やあ大言は吐くまいぞ！ その夜の色のやうな黒い装束ひんむを引剥い

て、晝ひるの光りに消すやうに命を奪とらずに置くものか。もし少女が推察しちがに違ちがひがなければ、お前は英國方の大將タルボオトであらうが。』
『聖靈せいれいがお前に告げないか。こりやジャンヌ、よくお聞き、今までは運命ちやうどが、丁度お前の奴隸どれいのやうに、なんでもよく服従ふくじゆうしたが、これあとから後の運命むほんが、お前に謀叛むはんを起さぬ先に、早くこの地を去つたがよいぞ。』

『お爲ためごかしの差出口さしでぐちは謹つしみなさい、神ちかに盟ちかつたわたしの任務つとめをしおふせないでなるものか!』

『何者も武器ではお前に手向てむかひ難がたからうが——ま、多くは言はぬ、ただ黙だまつてわしが戒いましめを用ゐたがよい。』

『なんの、高慢無禮な英國軍を打ちこらすまでは、この劔がはなさ

れようか！』

『あれをごらん、日影にきらめく、あのライムの塔を。お前は勝に

乗つてあの街に進入し、シャルルに王冠を捧げ、さうしてお前の誓

を完うしようとするのであらうが、まゝその望みは思ひ止まつたが

身の爲めだらうよ。』

『えゝ、何奴なれば、神託をみだりにして、わたしを誑かし嚇さう

とするのか。さあお名乗りなさい！ さあ。それとも刃の審判を受

けようとか？』

ジャンヌは、猶も去らうとする騎士の前にたちはだかり、怒りの

餘りに劔つるぎを抜ぬいて騎士を撃うたうとしました。不思議にも黒装こくさうの騎士は、それに對たいして敢あえて抵抗をしようとはしませんでした。さうしてジャンヌの振り翳かざした劔が、あはや騎士の肩先深くに喰くひ入つたと思ふと、刀身たうしんはもろくも二つに折れて、柄つかばかりがジャンヌの手に残りまのこした。それはサン・カトリンの劔でございました。

喪神さうしんしたやうに腕を垂たれて、茫然ぼうぜんとつたつたジャンヌの體からだを、瞬間に恐ろしい暗黒が包みました。きらめいて走る電光はその闇を裂き、雷鳴らいめいは烈はげしくジャンヌの身邊しんぺんに響き渡りました。

『おゝ！聖禮せいれいはわたしに或る曲事わるいことの近づきつゝあるのを告げられた！』

しばらく

こくさう

暫くにしてジャンヌはふと我にかへりました。黒装の騎士はもうそこに姿がなく、たゞ遙かな森の彼方に、ライムの塔がきら／＼と日に輝いてゐました。

しやう

『さては生ある者ではなかつたか？ この堅固な心を恐れ戦かせようと、騎士の姿を装つた地獄の使か、悪魔めか？』

よそほ

つかひ

けんご

おのゝ

ジャンヌは猶も暫く茫然としてゐましたが、よし、それとても何

おそ

を怖れよう、わが使命を果すそれまでは、地獄自らが来ようとも、

みづか

ゆうき

どうしてこの勇氣を失つてなるものかと、氣を取り直してそこを立去らうとしました。

をりあ

であ

と折悪しく出會つた一人の騎士、ジャンヌの姿を認めるより身構

みがま

へて、『やい魔法使まほうつかひの女、不思議なところで出會であつたぞ。我こそは英吉利軍中にその名を得えたるリオネル、お互おたに生きては此場このばを去るまい、さあ、來い！』

突き進まれるまゝにジャンヌは應おうじました。なんとなく劔つるぎのことが氣にかゝつて、不思議な氣けうとさが、ジャンヌの胸に蟠わたかまつてゐました。けれども、今かうしてリオネルにむかはれた時、ジャンヌは再び神を信ずることによつて自分に打ち勝ちました。

突き入いるのを外はづし、振り下おろすのを喰くひ止めるたびに、聖旗は烈しく揺ゆれて、リオネルの眼を掠かすめました。

『えゝつ残念！』

リオネルの劔^{つるぎ}は打ち落されました。とその時早くこの時遅く、隙^{すき}さず組んで来るのを、ひらりと外して隙^{すき}を與^{あた}へ、やゝのめりかげんになつた肩先に手をかける間もなく、ジャンヌはリオネルの兜^{りゅう}の龍頭^づをむづとつかみました。

『お前の劔^{つるぎ}で、さあ、お前の求める死を受取れ！』

ジャンヌは刃^{やいば}を拾ひあげました。さうして力を籠^こめて兜^{かほさき}をひき裂き、自分を見上げて自若^{じじやく}としてゐる顔先に、ぢり／＼とその腕^{うで}を持つて行きました。

それは、天地も息をひそめるやうな、不思議な、危険な一時でございました。ライムの塔は森の彼方^{かなた}に日をうけて輝き、瑠璃色^{るりいろ}の空

に、斑まだらの白雲しらくもがゆるく流れて行く！

ひとみ

瞳と瞳は、流れ出るほど暫くの間合つてゐました。ジャンヌの顔

やわら

は、次第やわらくに和やわらぎ、力を張つてのべた腕は、自おのづと静たかに垂たれる

ひい

のでございました。秀ひいでた眉、澄やいばんだ瞳、刃いのちの前に生命を投げ出し

どう

おも

て動どうぜぬ面おもざし。

なぜ

『何故なぜためらうのか、早く撃うて！ わが武運は傾いたのだ——さあ、

せん

なまなかの恵みも詮せんないこと、わしは今、全くお前のものではない

か？』

ジャンヌの手は知らずく動きました。さうしてそれは逃げよといふ意味を現はして居りました。

『否！^{いや} かうなつた上は、なまじひな慈悲は要らぬわい。さあ早く撃て、ジャンヌ。』

『あなたが命を、この手で失はうとは思ひませぬ！』

『お前を憎むばかりでなく、あはよくば殺しもしかねない敵をか？』

『では、わたしを殺して後に落ちなされ！』

『や！ 何としやつた？』

ジャンヌは胸の苦しさを隠さうとするやうにその顔を蔽ひまし

た。あゝ、神のみ心はすでに去つたか？何故なればその瞬間にのみ、

暖かな情が動いたのであらう！その目は血潮に馴れ、その腕は悉く

英吉利人を屠り盡さうと誓つたのであつたのに！

ジャンヌは心を勵まして、再び太刀を振り翳しました。切らうとして思はず見戍られる顔――あゝ、その瞳よ。ジャンヌの腕はまた力なく垂れました。

『あゝ聖母よ！』

『何故聖母を呼ばれる？ 神は味方されぬのか。』

『おゝ、わたしは誓を破つたのでございませうか？』

ジャンヌは氣遣はしさうに暫く佇んで居りましたが、その萎えた腕の力がどうすることも出来ないのを知つた時、烈しい失望のために倒れようとするほどでございました。

『不幸な少女よ！ どうやらその悲しみはわしにもおぼえられる。』

御身おんみはこのわしたゞ一人に憐れみあはをかけてくれるのか。してわしが憎しみももう消えてしまつた!』

『はやくこゝをお落ちなさいませ!』

『否! いや わしは喜んで御身を助けるであらう。その恐ろしい誓ちかひを斷たつて、その嚴めいかしい武器を棄すてるならば!』

『あゝ! わたしはもう、あの尊たうとい劔つるぎを揮ふるふことは出来ませなんだ!』

『ジャンヌよ、わしに従つてこゝを落ちなさい。御身はわしによつて救はれるであらう。さあ、もうためらう時ではなからうぞ。』

『おゝ! あそこにみえるのは必きつとデュノア様、わたしを探すので

ございませう、もしあの人達の目に觸ふれましたら……………」

『わしは御身まもを護もるであらう！』

ジャンヌは如何いかにも胸苦しさに、深い溜息ためいきをするのでございしました。

『再びわしは御身まもと言葉を交かはすことが出来るであらうか？』

『いゝえ、それは決してございますまい。』

『また逢ふまでの記念かたみに、その旗を裂さいて……………」

この時、ジャンヌは甦よみがへった人のやうにきつとなつて言ひました。

『やあ、神のみ旗に手を觸ふれるな！ 英吉利人イギリスじん！』

手分けをしてジャンヌを探すために、シャルルわかと分れたデュノア

とラ・ヒールは、今遙かはるに此様子このを見つけて、お互たがひの馬を飛ばせて
驅かけて來きました。

『少女子をとめこには御無事でをられましたか。』

『もう何ものも恐ろしうござりませぬ。友は御身の近くにまゐりま
した。』

『おゝ、あそこに逃げて行くのは、デュノアどの、ありやりオネル
ではござりませぬか？』

『まあ逃げるものは逃がして置きなされ。ジャンヌよ、正義せいぎはつひ
に勝かちを制して、ライムは廣ひろく門をひらきましてござりまするぞ。』

『おゝ、なんとまあ少女子の胸苦むなくるしげな様子は――お顔の色も青あをう

ござりまするぞ。』

『やゝ、手^て疵^{きず}を負^おつて居^をられるぞ！ はやくその胸^{むな}當^{あて}を外^はされい！

——なに／＼疵^{きず}は至^{いた}つて輕^{かろ}うござりまするぞ！』

『や、血が流れる！』

ジャンヌはそれらの言葉を夢のやうに聞きました。

『おゝわたしの生命^{いのち}よ、いつそその血と共に流れ出よ！』

自^じ失^{しつ}したジャンヌは、危^{あやう}くそこに倒れようとして、ラ・ヒールの

腕^さに支^さへられました。

ライムの塔は、猶もきら／＼と日に輝いてゐました。

【入力者注】（頁・行は底本のもの）

149-10 不幸な少女よ！。 ↓ 不幸な少女よ！

公開…令和三(2021)年八月三〇日

改訂…令和五(2023)年三月七日